

私共、邦人の帰国が決定し、ハルピン十三団第一病院列車の編成主任を命ぜられ、花園小学校を事務所として二週間に要した。九月一日乗車、翌日二日発車、途中鉄道破壊箇所もあり、現地人を雇い担送者の補充もした。渡船する場所もあったりもした。それに、二か所の検問所で、洋服や時計、万年筆等はすべて没収されてしまった。可愛想だったのは共産軍に看護婦が招集されたことだった。診断書控、委託金、領収書等みんな没収され、大事なものがなくなり全く都合悪かった。

こんなことをしながら、やっと錦西まで三日間で到着した。ここで、医療患者と健康者を分け、医療患者は日本の舞鶴港に、健康者は博多港にいずれもコロ島より出港する準備をした。出港するまで二週間も要した。

健康者隊の船はコレラ船となって、博多港に二週間も下船が許可されずにいた。この間船内に持ち入れられた、日本各地の戦災地図面で報告されたので、初めて空襲の大災害を知った。

## 回顧・随想録

東京都 露久保 甲 三

### 満鉄時代

生家、学生時代を省略し、昭和八年十月満鉄の募集があり、百人採用のところ千二百余人の応募者が新京（現長春）鉄道事務所であり、幸運にも採用され四平駅に配属となり、十月より十二月まで満鉄社員としての教育を受け、終了後は庶務、営業関係の成績が良かったので、最初の配置が庶務係であった。

毎日の仕事は、約三百人の駅員の乗車証その他満鉄関係に協力した方や株主などに優待乗車証を発行、来客の応対、徹夜勤務で各部署より翌日の作業計画の報告を受け、駅報掲載の原稿を作成し、とう写版で印刷、配付、二十四時、各営業関係責任者より収入金を持参、受領計算し金庫に納め、収入金日報を作成、二時より仮眠、六時に起床し当日の庶務、営業の作業一覧表を黒板に書き、業務引き継ぎ、その間に収入金を興行銀行より出張した者に納入して一日の勤務を終り、独身寮に帰り、食堂の

テーブルには大きなおひつで御飯、ミソ汁、タクアンなどは自由で（諸費は三食十五円）、納豆、タマゴは五銭ぐらいだったと思う。特別料理を注文すると部屋に運んで二円ぐらい、二、三人では充分。お酒は一円前後、そして夜の町できれいなエプロン姿の女給さん達のサービスマスで愉快に遊び、一眠りをして出勤。若さと張り切っていたので、からだもこわさずによく務まったと思う。

朝礼、点呼当日の業務通達後は、駅長室前の広場で社歌を合唱（冬はマイナス十度前後）天つき体操をして、各係の部署で前任者と引き継ぎ、一昼夜勤務のくり返しであった。

昭和九年五月、新京救島小学校において徴兵検査を受け、第一乙種合格で第二補充兵役に編入された。一年ほどして案内、出札、小荷物と営業各係を務め、小荷物では発送、到着の主務者を務め、昭和十一年、満州事変に参加の功績により、従軍記事と記念品を贈呈された。

昭和十二年七月七日、支那事変勃発、北支派遣軍輸送員として八月二日命令を受け、今後のうれいのないように仮払い金八十円で種々の支払いや生命保険などに加

入。四月奉天（現瀋陽）鉄道局に集合し、局長より激励や注意事項を受け、二十三時発の臨時列車に乗車し、各受持站（駅）に出発したが、その夜は満州には珍しく土砂降りの雨であった。

翌朝満州と北支の国境山海関駅についてが、北支方面の治安が悪く待機を命ぜられ、わずかな時間を利用して万里の長城を見学したが、当時こんな偉大な作業をなし国境として築きあげた中国の人びとに感動を受けた。二日ほど滞在して出発、唐山（石炭の町）でもや前線に不穩箇所があり待機、当地も非常に治安が悪く便衣隊が出没し、兵隊が青竜刀で数人殺害された。いよいよ日本より釜山経由で軍用列車が北支方面に輸送の情報が入り、指定配属站に私達六人は装甲列車で軍警備のもとに漢沽站に下車し、さっそく宿舍（站待合室）に枕木と雑草を刈り、下に敷きアンペラをのせて寝室とし、中国の站員と軍用列車の輸送に毎日毎日あたるといふ勤務態勢であった。

中国の站長は、鉄道大学を卒業された人格識見のある立派な方であった。站舎の裏はクリークで水は豊富だっ

たが、アルカリ性で飲むことも洗濯に使用することもできず、隣站より水槽タンク車で輸送、濾過をして使用する現状であった。

真夏から秋風の吹きはじめた十一月までにだいたい輸送業務も一段落となり、帰還命令を受けたときはとびあがるほどの嬉しさだったが、前戦の輸送業務に従事する者が残留となり、名残を惜しみ、おたがいの無事を祈り再会を約し別れた。私たちは輸送目的を果たし、派遣解除、元所属に復帰し、私は支那事変参加者の功績調査申請事務員として数名で十二月末までいた。当月は、賞与と派遣旅費の清算、給料等で千二百円余の支給があり、当時としては独身の私には大金であった。つらかったこと、淋しかったこともたくさんあったが、楽しいことで、いやなことはみな忘れてしまった。満鉄入社五年（二十四歳）でお世話してくださる人があり、見合いをして翌十三年五月一日、四平神社々殿において結婚式をあげ、中華料理店（公記飯店）で披露宴を両家あわせて八十余人の招待者より祝福を受け、盛大な宴であったことを五十年以上過ぎた今日でも目のあたりに浮かび、

健康ということはほんとうに幸福であると思う。

#### 産業課時代

四平駅小荷物事故係として十四年二月まで勤務し、奉天鉄道局産業課に転勤、造園、苗圃の現場との連絡、指示などをして、十五年四月東陵苗圃の責任者を命ぜられ、日本人五人、満人職員三十四人で、予算二万五千円程度、面積六十余町歩（六十ヘクタール）満鉄一の広大な土地であったが、地質は良いほうではなかった。

午前苗圃内の東側、午後西側という順序で巡回、五月から九月までの日雇作業人夫は二百人前後で、日当は三十銭ぐらい、年一回局の圃場内監査もあり、数日前より朝食（トウモロコシ粉でねり）平釜で焼いた万頭と漬物を早出（午前四時）の作業人夫に支給して働いて貰ったこともあった。

東陵というところは小高い丘で、約三百余町歩（三百余ヘクタール）この丘には、赤松林（樹令二百年以上）雑木林に囲まれ、丘の中央には立派な御陵で古代に造営され、色彩も豊かで、中国の文化がしのべれた。又当時としては設備の整った東陵ゴルフ場があり、日本の要人

が多数見えられ、一日を楽しみ鋭気を養っていかれたようであった。一年半ほどで元の産業課に転動して、管内の公園や社宅の樹木の手入れ、造園計画指導、冬期は日露戦争（明治三十七、八年）直後に造林したというカラマツの間伐をして気候風土の生育状況調査などし、非常に適している結果が出て、ますます満鉄としても力を入れた。造林を将来の満州の曠野を緑一色にする計画で満人と共同造林を逐次行ったが、昭和十六年大東亜戦争。世界の各国を相手にして始まり、いよいよ国家総動員令が敷かれ、一時中止となり、空襲の予防策として機関区、満鉄の重要箇所、社宅等の遮蔽を樹木で行うようになり、各苗圃より配給、輸送計画を現場に指示、指導で日々多忙の連続であった。

又、満州での楽しみはビアホールで飲んだ生ビールや曠野で本場のジンギスカンの味など、忘れようとしても忘れられない思い出であった。内地の両親のもとに二回（昭和十三年）新婚旅行を兼ねて六月より九月までと（十六年）子供を連れて九月より十月まで帰国している。私の一番頭に残り感謝していることは独身時代、寮に

いた頃、明治十六年生まれの母親より手紙をもらったこととで、母親の書いたものは最初で最後だった。

#### 召集令状（昭和十九年三月）

大東亜戦争も激烈化し、在満者に現地召集があり、私にも、三月十一日奉天駅七時三十分臨時列車に乗るよう指示の令状があった。妻子との駅頭の別れもなく、奉公袋を風呂敷に入れ、行き先はソ満国境綏西駅○部隊に十五日入隊した。部隊より迎える者がきており、駅より十キロほど離れた山腹の中段に兵舎（木造バラック）に入った。三月中旬とはいえ、国境の寒さは、ことのほかで、さっそく防寒具を着用し、ソ連軍の見えるま近くの丘の上で教練を受け、泥まみれの毎日であった。

#### 部隊の移動（昭和十九年四月）

教練半ばにして、貨車を二段に仕切り、動物輸送なみに積みこまれ四月二十一日、軍の秘密で行き先不明。だが、私は在満十数年なので、想像はついた。妻子の住んでいる駅を夜中に停車し、なつかしく、駅を通過する時はまさに断腸の思いだった。輸送中に衛生兵の教育を受け、満州・北支・中支と列車を乗り継ぎ、揚子江をさか

のぼり、漢口に上陸し、さっそく病院を開設、患者の収容、看護と数カ月で武昌・岳州と前進、又前進し、衡陽と各所で開院した。病院とはいえ、爆撃を受け、患者共どもも生きた心地はしなかった。八月十五日敗戦の詔勅があった。その間、陽子江沿岸漢口の七、八月は落雀の都ともいう暑さで、午後一時より三時まで休養、午睡と、しかし敵機の襲来で、爆弾投下、機銃掃射で、ほんとうに恐ろしい思いをした。

敗戦後（昭和二十年八月より二十一年七月）

中国の人びとに罵倒、これも幾多の迷惑をかけたので、肝に命じ、我慢せざるを得なかった。

終戦後とはいえ、患者をみないわけにもいかず、糧秣は玄米、粉ミン、岩塩と、野菜などはなく、雑草の食べれるものは取り、山の雑木などを集め、燃料とし、生命をつないできた。私たちも限度があり、栄養失調にかかり、やせ細り、生死の境を彷徨したが、死に神よりのがれ、幸運にも恵まれてやっとのこと二十一年七月、陽子江を下り、上海より「LST」で浦賀に上陸、DDTの消毒を受け、二日ほど滞在して復員、生家へ七月十五

日夜十一時過ぎに着いた。両親や兄弟は、生死不明の私りが、盆の夜中に帰ったのだから、お化けが佛かとびっくりしたようだったが、それもつかの間で、ただちによるこびとなった。

それからの生活は、何一つない着のままで、疲れはてた夏軍服だけだった。これからの生活設計もたてなければならず、安らかな日はひとときもなかった。

妻子の安否

満州に残してきた妻子には蓄えとてなく、敗戦後五歳の子どもを連れ、丸坊主になり、必死と路頭に立たせ、来る日も来る日も品物を仕入れいくばくかの利益を得て、二人の生活を支えて、帰国命令を待ち、一日千秋の思いで頑張り、無我夢中に働いたという。

又主人はどうなっているのだろうか、義父母達は果たしてどんな生活をしているか、労苦もなみたいではない、淋しさかぎりなく、敗戦後一年近くなるのに母国にも帰れず、山河の夢もたびたび見たとのことであった。私より一か月後に舞鶴より連絡があり、無事だったとの知らせを受け、小さな田舎の駅に迎えに行った。降りて

きた妻子の顔はまっ黒で、泥とはこりで見るとすべもなかったが、子どもがとびつき、涙をポロポロ落した。ほんとうに嬉しかったことと思う。いまでも当時の光景が四十年過ぎた今日でもまぶたにやきついている。

東京の生活（昭和二十一年暮より今日まで）

半年ほどふるさとに住んだが、こんごの生活、設計方針を東京と定め、上京就職はしたものの、衣食住に困り、親子三人で四畳半一間を借用し、なんとかしなくてはならないと思ひ、当時は焼野原で空き地が多く、すこしの土地を借用して妻子と休日を利用して、開墾整地をしてバラック（木材二寸五分、屋根はトントンぶき）をつくった。すき間風も素通りで、寒さもことのほか身にこたえ、家族共ども病におかされ、入退院の連続であつたが、現在ではなんとか病魔も去つた。一時はわが家はどうなるかと案じた。十数年後に、バラックも建てかえることができた。しかし借財にいたつては返済中で、いつになつたらわが家となり、安らかな夢を見、楽しい思いができるであろうか。いつまでもいつまでも平和でありたいと祈念しているものである。

## 引揚記

沖繩県 池宮城 幸興

二・二六事件の発生で、国内がまだ騒然としている昭和十一年三月に、私は那覇商業を卒業して、地元の銀行に勤めました。十二年には日支事変勃発、十三年、十四年は張鼓峰事件、ノモンハン事変とソ連との紛争が相次ぎ、日本が危急存亡の立場にあることが身に沁みてわかりました。

私は十四年の徴兵検査で第一乙種に合格しましたが、補充兵に回されました。銀行に勤務してから四年後の十五年三月、かねて転職を希望して申込みをしてあつた満州国新京市（現、中華人民共和国吉林省長春市）の金融合作社連合会（満州国の農村金融機関で農事合作社と合併、四月から興農合作社中央会となる）から採用と赴任を促す通知が来しました。当時、満州は日本の北の生命線とも言われておりましたので、このまま、安穩の日々を沖繩で過ごしているわけにはいかないとの焦燥感が、私